

第10回新鋭評論賞

正賞

加藤知世子論―俳句という光

吉川 千早

加藤知世子論―俳句という光

序論

本名チヨセこと加藤知世子は新潟県出身。結婚後に夫の影響で俳句を開始。生前に『冬萌』はじめ五冊の句集を、死後には『頰杖』『加藤知世子全句集』を世に出した。全集の別刷付録には金子兜太、森澄雄らが名を連ねている。と、書いてもすぐに知世子の人物像を想起出来る人は少ないだろう。今、彼女は加藤楸邨の妻として主に知られている。今、と書いたが存命中も「楸邨の妻」として扱われることがたびたびあったようである。

「先日知人から、『あなたの俳句は楸邨の手が入つてゐるんじゃないか、と人が云つてゐましたよ』と云はれた。今までそのやうなことを、雑誌にかかれたこともあつたし、直接云はれたことも一、二度あつた。(中略)わかつてくれる人の一人と思つて尊敬してゐたひとだったので、相当ショックをうけた。俳人の妻の作品は、いくら一所懸命で作つても、結

局このやうな目で見られるのだらうか」(『加藤知世子全句集』)注1

知世子の味わったショックからは自分が独立した一作者であるという強い自負が見て取れる。実生活では二十歳で楸邨と結婚し六児を設け、そのうち二歳で亡くなった次女を除き五人の子を育てあげた。戦争があり、家計の苦労があり、楸邨も知世子も大病を繰り返したことを思えば、非常に苦労が多かったことが察せられる。主婦として嫁として家族をケアするという役割は、彼女の人生の大きな部分を占めていただろう。その中でも知世子は決して俳句を手放さなかった。

一介の主婦というわけではなく、独立した一人の作家として強く認められたわけでもない知世子。ここから彼女の句業を見ていくにあたり「役割」と「個人」という二つの視座を提示したい。

主婦であることと俳人であろうとすることは矛盾しない。しかし、社会から要請された主婦という役割を完璧に果たそうとすれば個人の自由が抑圧され、俳句作家という個人であろうとすれば役割を果

たし切ることが出来ない。そのような葛藤は、現在を生きる我々にも身近なものである。役割は時代の中で社会から要請されるものだ。そこから外れてただ個人として生きるとは難しい。知世子は常にこの二つの対立の間でせめぎあっていたのではないだろうか。さらに言えば現代は、敵と味方という二項対立がすぐ発生し、易々とその対立が激化する傾向がある。

本論では役割と個人とを生きた知世子の句業を見ていく。その中で明らかにされるものは知世子の句の読み解きに留まらず、今現在の我々の葛藤を解きほぐす道しるべでもあるはずだ。

本論

・俳句に出会う

新潟の農家から兄を頼って十八歳で上京した知世子は、勉強を教えてくれた縁で出会った加藤健雄と二十歳で結婚。中学校教員となった加藤健雄は同僚に誘われ俳句を始め、やがて楸邨という俳号を名乗る。ある日「君も俳句を作って御覧よ」という夫の勧めで初めて知世子は句を作る。

雪降ればあたり一面銀世界（昭和四年）

この時の思い出について知世子はこう回想している。

「そのころ最も苦境に立っていた私は、一日とて心安らかな日はなかつた。けれどもその日の雪の眞白い光を見てみると、この時ばかりは心のわだかまりが一度に拂ひのけられるやうな気がした。（中略）この句は全く恥ずかしくて今頃夫の前でなど話せないやうなものであつたが、しかし私が初めて俳句を作らうとする目で見たその雪の眞白い光は、私の故郷で毎年見て育つた雪國の雪よりもはるかに印象深く、今なほ鮮やかにきらめいてゐる」（『女性俳句』）

注 2

「最も苦境」に立っていたと振り返る当時の状況について、知世子自身は具体的な記述を避けている。だが、その頃の加藤家の経済的厳しさと共に、楸邨の母から歓迎されていなかったことが推測される。

「私は母の意志に従わなかった不孝な結婚をした男であり（中略）母も半生随分苦しかったのだと思います。私も半生それが負目おいめになっていました。中でも最も悩んできたのが知世子だったと思います（中略）母には一切自分をこころして仕えてきた」注3（『加藤楸邨全集』）

と楸邨は言う。また、知世子の第一句集『冬萌』には「悪妻」という章がある。

嫁てふ場茶の花はうつむいて咲く

嫁に飛ぶ言葉野分が袖吹きぬけ

虎落笛嫁が泣く場は詩の中

嫁の晴着に雪が模様となつて降る

これらの句から、知世子がいかに嫁という立場に苦しんでいたかがわかる。知世子は嫁という立場、つまり嫁という役割に苦しんでいる最中で俳句と出会ったのだ。嫁という役割の中では泣くことすら許されない。「詩の中」でしか泣けない知世子個人の

辛さが垣間見える。後に知世子と姑は和解するのだが、知世子は嫁姑問題で苦しんだことについては苦境の一言ですませ、多くを語らない。そのことからも知世子があくまで嫁という役割を「わきまえて」いたことが察せられる。

そんな葛藤の中で作句を試みた知世子個人の目は、初めから雪という物に向けられている。過去の雪を思い出すのではない、積もるであろう雪の始末といった未来への対策を思うのでもない。いま目の前の「雪」と直接出会うことを、知世子は最初から求めている。それは「心のわだかまりが一度に拂ひのけられるやう」な体験であったのだ。

第二句集『朱鷺』の後書きにも物と出会うことについて書いた一節がある。

「旅をする機会に多く恵まれました。多くのものに直接接触れることによつて（中略）心打たれたことは、それぞれの中に意外に輝くもののあることでした。これは日常に於いても同じことで、対象を生かすに

あたつて千変万化することのできる柔軟性と真の強さをもちたい」（『加藤知世子全句集』）注4

このように知世子は句作するにあたり物と出会うことを非常に大切にした。楸邨の随筆「遠近」の中では、「鱧はいまいづく漂ふ十三夜」（昭和五十三年）という楸邨の句に対して

「私は泣き節はやりません。どこまでも物に即して詠んでゆくから、いづくに漂うのような詠嘆は表に出さないで抑えてしまえますよ」（『加藤楸邨全集第六巻』）注5

と知世子は言っている。この作句に対する姿勢の違いで楸邨が家出するほど喧嘩したことが、子である加藤穂高によって書かれている注6。知世子にとって物を詠むということの大切さを表すエピソードだ。さらに国内の旅の中で物を詠んだ句を二句挙げる。

兔落つ雪まみれにて陰赤く（昭和二十九年）

寄るや冷えすさるやほのと夢たがへ（昭和五十一年）

撃たれた兎の様子を淡々と描写する様子からは、あくまで兎の命を物として見つめる目を感じる。法隆寺の夢たがへ観音を詠んだ句では、夢たがへ観音を視覚的宗教的にとらえるのではなく、人と像の距離を冷たさほのあたたかさという皮膚感覚として描いている。どちらの句も感傷を抑えたところへ対象を出すことにより、兎や仏という物と新しく出会い直している句だと言える。死んだ兎と夢たがへ観音は遠く異なっているが、両者とも物としての出会いは直しにより実存という新たな尊さを得ていることは変わらない。

それでは物と出会うとはどういうことなのだろうか、ヒントは「詩」にある。知世子は詩という字をよく使った。全句集を見ると詩についての句は三十句近くある。その中でも特に詩を詠むということについての句を挙げる。

もの云ふと詩が消えさう瑠璃沼澄む（昭和四十年）

棋檯の実詩となるまで持ち歩く（昭和五十年）

表現したい私と物のせめぎあいがある。美しい瑠璃沼が澄んでいく様は詩だ。詩は存在している。しかし言葉にするとそれは消え失せてしまうのだ。棋檯の実という物が詩という言葉になるまでは、我が身に触れさせ共に在らねばならない。しかし詩になったとき物としての棋檯は消えてしまう。というのも棋檯の実を俳句という言葉にしたとき、「棋檯」という文字は実物の棋檯とイコールではないからだ。物と存在同士として出会い肉薄すればこそ、実存が言葉ではつかめないことに至ってしまうジレンマ。それは「消えそう」「なるまで」といった、不在であることを指し示す表現をもってなんとか表せる実在なのだ。

「知世子の底に流れてゐる、生きて動いてゐる世界でこれを追ひかける瞳は、いつもはるかなものに向けられていた。その生きて、つかみとつて、自分の

言葉にしたかつたのだ。知世子のことばでいふと、『詩』がそれにあたるらしい』（『加藤知世子全句集』）注7

楸邨の言によるならば、知世子にとっての「詩」とは、不変的に実態のようにとらえられている。「もの」つまり名詞として定義出来るものではない。「生きて動いている世界」の中でその都度「自分の言葉」として表現する「こと」こそが知世子にとっての「詩」なのだ。なぜなら世界は「生きて動いている」のであり、知世子自身も常に変化しているからだ。世界に存在している物は不変であることは出来ない。物同士は毎回必ず変化の中で出会うのだ。そんな中「もの云う」のは言葉によって何かを定義してしまうことでもある。すると瑠璃沼の「詩が消えさう」になる。知世子は随筆で朽ち木の燐光の思い出をこう述べた。

「身は朽ち果てて尚発する光、これが本当の光かも知れない」注8

「朽ち果て」物自身は消え去ろうとしていても、その瞬間に環境と反応して光が発せられる。物と出会い俳句にするいうことは、このように生起消滅の流れの中での出会いを「詩」という表現とするということだ。知世子にとっては物と出会い関係し表現することが「詩」であり「本当の光」である。知世子が求めた続けたのは、このような光なのだ。そこに「個人」「役割」はどう関わっているのだろうか。

・個人として出会う

滝音に兄呼び己が地声知る（昭和二十八年）

父母なくとも位置は末子や豆の花（昭和二十八年）

滝の音にかき消されないように思いつきり兄を呼ぶ。はっとこれが自分のもとの声だと気づく。地声を知るというからには、それまで自分の地声を知らなかったのだ。故郷にいる間は自分の声を本来の自分の声だ、などと意識することはない。故郷を離れ戻ってきてはじめて自分の元々の声を、ひいて

は本来の自分の姿としての子ども時代を認識することができない。子どもだった知世子は東京で嫁となり母となった。過去と離れた立場に身を置くことで人は以前の自分の姿と出会うのだ。

父母亡き後も自分は末っ子であると再認識した知世子。これは故郷や子供時代の自分との出会い直しだ。豆の花という身近な畑にありさりげなく可愛らしい花には安らかさを感じる。故郷の中で知世子は嫁や母といった役割を持たない、居ることに理由がいない状態にあった。子供は守られていることにすら気が付かないのだ。故郷を詠んだ知世子の句は伸びやかで明るい。故郷への旅で知世子が出会った、役割を得る前の知世子個人と世界の関係はこのように幸福な光に満ちている。

燕の素早さこの家を脱け我が旅発ち（昭和三十五年）

春雲錦ふつと絶ちたき主婦の継（昭和三十四年）

知世子の句には家の外へ出る喜びがあふれている。知世子という人が特に加藤家の主婦や嫁という

役割に力を注いでいた、というそれだけではないのだ。戦前から女が家から出歩くことは不行儀なことであり奇異なこととされていた注9。その後昭和三十年代には、女性が旅行に出ることを雑誌が後押しする風潮になる。しかし「主婦」の旅行に対しては厳しい目が向けられていた注10。家族から離れがたく繋ぎとめる「継」と知世子が表現する主婦という役割。昭和三十年の女子労働力率は五十六、七パーセント、専業主婦世帯は増加傾向にあり、女性が結婚したら主婦になることは自明の前提とされた。注11さらに俳壇には主婦の俳句は有閑俳句であるとの批判があった。注12女の家庭での労働は社会から重要性が認識されておらず、当たり前前の役割であったのだ。そんな中で知世子は国内外の旅を続けた。特に御母衣のダムの工事現場での体験は作句の指針を見出す機会となったようだ。

御母衣ダムの現場 十句 昭和三十三年

夜ごとの赤らみもうぢきダム底の鬼灯畑

夜干のシャツのその力癖青嵐

虫干四五枚それに少女等寄りて遊ぶ

（地底二百米余、女禁制の地下発電所なれば男装にて入る）

坑の滴り石の響きで鉄帽打つ

燈矢に余りて鑿岩工に夏瘦なし

闇の涼しさ手さぐりたしかに火縄つめる

滴る岩盤全面を検して一部を切る

汗の土工等リレーで笑ふ我が男装

芋茄子竹輪煮ゆる崖上土工帰る

男に咲く発破青嶺を噴きあげて

いずれの句も美しくまとまった句ではない。定型に収めることが出来なかつたほどの衝撃があつたことが思われる。

「あそこの人たちでも入るのを嫌がるといふやうな深い地下の発電建設現場へ入つて見てました。そこへ行つて想像以上のきびしいものを見て自分の俳句の方向つてのがうす／＼見えたやうに思ひました。事柄があつてもものを言ふんじやなくて一つの物がズ

カツとあつてそのまはりに、事柄や抒情が漂ふんじゃないか」注13（『女性俳句』）

と知世子は『女性俳句』の対談の中で述べている。ダム労働現場はきびしく、知世子が立ち入った際にも死人が出ている。それでも知世子は「来てよかった」注14と言う。「従来の女らしさも、ここではどうにもならない」注15と知世子が感じたように、知世子は、嫁や主婦といった女としての役割の外で「ズカツ」と「一つの物」と出会う経験をしたのだ。

更に知世子は出会いを海外にも広げていく。特に知世子が繰り返り返し旅に出たのはシルクロードである。役割を果たさなければならぬ家庭や、それを要求する日本社会から遠い場所だ。

地下の棺に触れねばやまず汗の指（昭和四十八年）

風光るドタール弾きの肉動き（昭和四十九年）

駱駝の背に子を積み鶏積み包たたむ（昭和五十一年）

地下の棺に触れて汗が止んだ。地上の熱さ地下の冷たさが思われる。前書きによればここに埋葬されているのはチムール王家の人々だ。地上で汗を掻いて生きる者が地下の棺に触れる、すると汗が止む。体が冷える実感を通して死者と近くなっている。汗の指、と、体の一部を物のように捉えることで、王という役割を終え、物となった死者の肉体と自分の肉体が同じ物であるということも感じられる。

ドタールの句は肉の動きにまで踏み込んで詠んでいる。弾いている人を眺めるだけではなく、まるでなりかわっているかのような近さがある。光る風、ドタールの音楽と弾く人の肉の動きが一体の輝きと なってなりかわりを魅惑してくるのだ。人は既存の役割を出て、自らの肉の動きとしてドタールをの演奏を感じるのだからその誘惑に乗ることは出来ない。

駱駝の背に財産がすべて手際よく積まれる様子は、まさにその土地の遊牧民の暮らしの一部に接近している。句を詠むことで自分が日頃役割を果たしている、日本の主婦、家庭におけるお母さんという

ような役割から遠い暮らしをリアルに感じることが出来る。すると自分の果たしている役割を相対化して見ることが可能になるのだ。

「物に直接ぶつかって感動することができたならこれを俳句にする」注16という知世子。世間の要請する役割から抜け出し、身一つでぶつかれるシルクロードへの旅は、役割の外で個人を深く確かめる格好の機会だった。知世子は八回、時には夫を伴わずシルクロードへの旅に出ている。

役割を離れ、過去の自分や生きる環境の異なる人々、あるいは時空を超えた出会いを経て、知世子の句の世界は広がり深まった。知世子が旅によって得たものは個人としての出会いである。

・役割を通じた出会い

一方で役割があればこそ出会えたものもある。

保母の手よりこぼれて帰る着ぶくれ子 昭和三十一年

保育園のお迎えの景であろう。今まで保育士と遊んでいた子供が、自ら待ちきれないように知世子の

もとに駆け寄って来るのだ。こぼれるという言葉から、子供が自然と自分へ向かって来る様子がわかる。子供は元来ふくふくとやわらかな物だが、着ぶくれることで更に輪郭がころころとふくらんでいる。主として子育てという役割を引き受けた者だけが出会える甘やかな瞬間である。

嫁の座や焚かねば夏炉すぐ湿める 昭和四十三年

木曾路を旅した時に世話になった家の景である。

夏とは言え山中は気温が低い。常に火を焚いていなければ炉が湿ってしまうのだ。家事には完了がない、家を維持するためには常に手を動かしていなければならぬ。そして火を管理するという大切で大変な役割は嫁の物なのである。家族構成の位置に応じて座るべき位置が決まっており、嫁の座は最も下座であった注17家を維持するという重要な仕事を当たり前に任せられしかも地位が低い。そんな哀れを詠めるのは、知世子自身が苦しい家計を切り盛りし姑に仕えた嫁という役割の経験あればこそだろう。

また、知世子は雑誌『女性俳句』（昭和二十九年〜平成八年）に深くかかわっていた。『女性俳句』は超結社の女性俳人のための雑誌である。俳句だけでなく随筆や評論も揃え、外部から執筆者を招くなど意欲的な雑誌であった。

昭和二十九年、読者からの「女性俳句が今も『尚特殊なものやうにあつかわれていはいはしないか』」という質問に知世子はこう答えている。

「そのやうな批判をいまだに、男性が女性の俳句の上には振廻すとしたら、男性としてはもう古くさい（中略）女性の泣きどころを最も通俗的に衝く。それは、いつの時代にも、どんな場合でも、男性が女性に對して最も安易に打下すことの出来る全くありふれた斧であり、非建設的な批判です（中略）」

もつと視野を擴げ、個性を伸ばすことによつて、女性作品の裏側に横たはるといはれる障碍物を乗越えるやうに努力しませう（中略）思ふ存分それ／＼の作風を育てて下さつて、一人々々のものにして頂きたいと思ひます。『女性俳句』とはさういふ場なのです」注18

「女性俳人」が、ただ「俳人」となるための道筋の一つには知世子が関わっていたのだ。歴史の中で社会に求められた役割にただ押し込められるのではない。役割を通じた連帯によって多くの仲間に出会うこともまた俳句による光である。『女性俳句』に知世子は創刊から参加し、知世子が亡くなった昭和六十一年の四十八号は加藤知世子追悼として、多くの女性俳人が参加して編まれた（殿村菟絲子 鈴木真砂子 桂信子 野沢節子 丸山佳子 横山房子 中村苑子 渡辺幸子 河府雪於 河野多希女 等、二十五名が随筆や連作を寄せ、他の多くの女性俳句メンバーも彼女を追悼する句を寄せた）注19 結社を越えて毎年新年会や大会を行い、知世子も亡くなる前年まで欠かさず出席している注20。時にサロンの的であるとの批判も受けながら、知世子は黙々と発行所の役割を果たした注21。知世子亡きあと「『女性俳句』をこのまま続けてゆくかどうかで私たちは随分迷った」注22と桂信子が回想しているように、知世子の存在は雑誌にとって大きな要だった。知世子が多く俳人と出合い、女性俳人達と連

帯できたのは「しつかりと手を繋ぎ合つてゆける場」
注23として『女性俳句』を支えるという役割への
意志あればこそである。

・個人と役割の出会い

個人と役割両者があればこそという句もある。

夏瘦始まる夜は「お母さん」売り切れです（昭和
三十三年）

子育てにおいて夏、それも子供らの長期休暇中は
体力を消耗するきびしい季節だ。自分が夏瘦せを自
覚し始めた夜でも、なお家族は「お母さんお母さん」
と自分を頼ってくる。このころの加藤家にはまだ四
人の子供がいた。知世子は家庭唯一の主婦として忙
しい毎日を送っていただろう。このしんどさを乗り
切るためにも、知世子は自分の役割としての母をカ
ギカツコにくくったのではないだろうか。売り切れ
という言い方からは「お母さん」を自分そのままを
表すものではなく、商品としている様子が見てとれ
る。「お母さん」を役名や商品名のようにカギカツ
コで取り出して見せることで、「お母さん」は自分

が演じる役割の中の一つであり、時には知世子個人と切り離せるものだ。自ら認識するのだ。家族にも「お母さん」という役割に対して君たちは要望をもっている。お母さんを演じている知世子個人とは向かい合っていないということ。気が付かせ得る。夫である楸邨はこの句についてこう述べている。

「『笑ひ』のある句だった。句は『夏瘦始まる夜は』といふ発想を見ると、知世子の性格からみて、どうしても生真面目な生活が、出てくるやうな感じにさせられてしまふ。ところが『お母さん売り切れです』と読んでゆくと、意外な感じがして、つい笑はさせてしまふ。生活は生活でも、子供達とのやり取りを生かしたものだ」（『加藤知世子全句集』）注24

役割としての生真面目な「お母さん」から「いいないばあ」のように知世子個人が「売り切れです」とひよいと顔をだす。この意外さについて笑いがこぼれる。

「お母さん」なのか知世子個人なのか、個人と役割のどちらを意識するかで人間同士の関係は変わる。役割と個人は対立関係のように感じられがちだ。しかし、個人と役割の双方があることで成立しているこの句は、私たちに個人と役割の関係を改めて見直させるはたらきを持つ。

・個人と役割をほどこくもの

ここで知世子の蛾の句を見て欲しい。

冬の蛾を詩として命短かかり 昭和十六年

前書きに友の死とある。知世子三十二歳、自身も入院していた年だ。冬であれば蛾はほとんど動けない。嫌われることが多い虫であり、美しさをわかってくれる人も少ない。しかし、そんな蛾を知世子は自らが求めてやまない詩だという。存命中の最後の句集『飛燕草』の後書きにさえ「いつまで経つても自信がもてない」注25と記した知世子には、詩を冬の蛾に例えるような陰がある。

蛾を救ひその灰色はふり向かず 昭和十八年

黒き服蛾のごとくゆく曼珠沙華 昭和二十六年

蛾を助けても振り向かず感謝もされない、蛾は曼殊沙華の中の黒服という不吉さのようでもある。一方で凛々しく自らの意思を持って進む様がある。

火蛾打つて男身边に白髪散る 昭和三十七年

光に誘惑されて火に進み、死に向かうばかりなのに男に打たれる。一方それにより自らの醜い老いを露呈させる男。男とあえて明示されることで、蛾には女を感じる。

己を喰ふ冬蟻を曳き蛾があるく（昭和三十九年）

冬の虫たちである。もう飛ぶ力は残されていない蛾に、蟻が喰いついている。冬であるからにはわずかな数の蟻であろう。蛾が、蟻もろとも必死に前に進もうとしている様には切実な命の迫力がある。蛾は己を喰われていても生きて進むのを最後まで諦めない。それは知世子の生きた姿と似ている。知世子

は六人の子を産み、姑と子を看取り、家族を、また俳人楸邨を支えた。四男忍の産後、知世子は母乳の飲まれすぎで貧血を起こして寝込んでしまったことがある。この時楸邨は

「新しく生まれてくるものはみんな親を食いながら食いやぶってそだつんだね」（『加藤楸邨全集』）
注26

と、つぶやいている。子供だけではない。戦中戦後の食糧事情の厳しい時代に、加藤家の食べることを支えていたのは知世子であった。「女の目」という随筆の中で楸邨は知世子について

「戦後、食料の買い出しにでかけたら、女房の方がはるかに多く背負うのでびっくりしましたよ」（『加藤楸邨全集』）注27

と書いている。それだけではない、飢えをしのぐため知世子は草を摘んだ。知世子は植物に詳しく、はこべやあかざ野蒜擬宝珠など食べられる野草を家族総出で摘んだ注28。楸邨はこの頃知世子に食べ

させてもらったことへの感謝を随筆の中で繰り返して語っている。

知世子も蛾も必死に生きた。ただ、蛾は蟻に食べられつつある。知世子も人生のかなりの部分を主婦という役割に捧げた。こう見ると蛾は、一方的に自らを蟻に与えているように見えるかもしれない。弱肉強食という関係の中でならば、蛾が負けたと言ってもいい。しかし、句の中で蛾は前に歩き続けている。知世子は蛾と蟻を安易な関係に落とし込むことなく、両者と出会い俳句にしている。

死の塔の半ばにて蛾の落ちにけり（昭和四十七年）

知世子自身の句の註には「塔は高さ四十六メートルヤンの塔 ミナレ ミナールとも呼ばれ 昔砂漠を旅する隊商の灯台の役目をしたり 市民や隊商を礼拝に呼び集める通報台の役もした 死の塔と呼ばれるのは昔罪人を袋に入れて上から投げおろしたからだといふ」（『加藤知世子全句集』）注29とある。祈りを呼びかける場と処刑の場という二面性が

ある塔だ。灯台の光を求めて飛ぶも、半ばで落ちていく蛾。何かを求め続けるも挫折する姿だ。

「俳句を始めてもう四十年近くになるが、いつの間にか、厳しいものや、暗い現実の中からでも、生きる方向を示すやうな光明を探りだしたいと願つてゐた」注30（『加藤知世子全句集』）

俳句を、何か創作するということは何かを求め続けることに似ている。特に知世子が求めていた詩は「こと」だ。物と自分が、変化の中で出会う事を表現する。その出会いは一回性の出来事なのだ。「こと」である以上、作り続けることをやめれば「こと」の光は、知世子の前からは消えてしまう。

これら蛾の句を見ていく中で、一つのイメージが浮かび上がる。一抹の陰りを持ちながら光を求めて進み続け、そして力尽き敗れる姿だ。

俳句を詠み女性達の連帯を支えた知世子は決して単なる敗残者ではない。ただ、高名な俳人の妻という役割の方を重く見られることがあつたのは序論でのエピソードが示す。これは蛾が蟻に喰われるよう

に、知世子個人の力が役割には及ばなかったということなのだろうか。家庭を支えることに多くの力を注いだ知世子の人生における個人と役割のせめぎあいには、役割が勝利したのだろうか。

そうではないことは、ここまで見てきた知世子の句業から明らかだ。知世子は、全ての役割を逃れ個人となつて俳句を求めめるのではなく、個人を押し殺してただ役割に生きてたのでもない。個人と役割は勝敗を決するような二項対立の関係ではなくなつていく。なぜなら知世子はそれらを表現したからだ。知世子の表現の中には個人があり役割があり、役割と個人があつた。一人の人間と周囲の千変万化する関係を知世子は詠んだ。役割と個人は、表現という場へと出ること、俳句という新たな意義を得ているのだ。役割と個人という「対」、非「対」の関係は、表現という意義を得ることにより、二項対立が解消された。役割対個人という「グー」と「パー」に、俳句という「チヨキ」が入ること、ジャンケンのように対立はほどかれた。役割と個人と俳句なのだ。蟻に喰われた蛾の姿に知世子が出会い、俳句という光へと昇華させたように。役割にも個人にも、等しく俳句という光が

降り注いでいる。役割 個人という互いへと向けば葛藤となる矢印は、俳句を通して物の光を求めるという方向へとも開かれた。

「光明を探りだしたい」という願い。物の光を追い求めるといふ知世子の俳句が、第三の項となり役割と個人の葛藤をほどいたのだ。

結論

知世子は俳句という表現があることで、役割対個人との単純な二項対立から逃れ得た。なぜなら、個人と役割の両者を生きながら、時代や社会という大きな流れとの間で出会った矛盾や葛藤、あるいは喜び祈りこそが表現の源であるからだ。俳句という表現を追い求め続ける知世子にとって、個人を生きることと役割を果たすこと、どちらにも意義があったのである。

紅の花枯れし赤さはもうあせず（昭和三十年）

知世子の墓誌に刻まれている一句だ。芽吹き成長し咲ききった紅の花の赤さは、枯れた後にはもう変化し褪せることはない。詩を求め物と出会い続けた

知世子は、生き方そのものが表現となり、残した句は我々の今日の前にある。その姿は、知世子と同じく個人と役割を生きつつ俳句を詠む今の我々にとつて一つのロールモデルとなり得る。そして、現代の二項対立ゆえの葛藤を解く道しるべも知世子の句業の中に見つかったのではないだろうか。

加藤知世子は現代において読む意義があり再び我々が出会うべき作家だと考える。

〈注〉

① 『加藤知世子全句集』 邑書林 平成三年刊 四六一頁

② 『女性俳句』 創刊号 昭和二十九年五月春刊 十頁

③ 『加藤楸邨全集』 第6巻 「『みとり』のこと」 講談社 昭和五十五年刊 八六頁

④ 『加藤知世子全句集』 一八二頁

⑤ 『加藤楸邨全集』 第6巻 「結婚爾来四十九年」 講談社昭和五十五年刊 三十八頁

⑥ 『新編 加藤楸邨全句集下巻』 榎 「両親につ

いて」加藤穂高

⑦ 『加藤知世子全句集』 五四九頁

⑧ 『加藤知世子全句集』 「静と動の光りの中から」
四百五十四頁

⑨ 『信州女性史』 長野県連合婦人会 昭和四十一年 二五五頁

⑩ 森正人『昭和旅行誌―雑誌『旅』を読む』 中央
公論新社 平成二十二年 一四八頁

⑪ 女性をめぐる性役割の葛藤処理法の変遷 ――

1950年代から 1980年代の主婦論争に焦点を当て
て―― 妙木 忍 ソシオロゴス編集委員会ソシオ

ロゴス NO.29 / 平成十七年 Sociologos

(u-tokyo.ac.jp)

⑫ 『女性俳句』昭和二九年秋号 四十五頁 知世子
は女性の労働に関して「働く婦人」とこと更いは
なくとも皆働いているのです」と述べている

⑬ 『女性俳句』昭和五十九年春号 六十四頁

⑭ 『加藤知世子全句集』 「静と動の光りの中から」
四五八頁

⑮ 『加藤知世子全句集』 四五八頁

⑩ 『加藤知世子全句集』五一七頁

⑪ 大西佐七のザ・飛驒弁フォーラム「火なたの横座・
かか座考」

http://www.ctk.ne.jp/~yamamoto/hida_dialect/es_say_ohnishii/yokoza.htm

⑫ 『女性俳句』 「『女性俳句』についてへの返事」
昭和二十九年秋号 四十七頁

⑬ 『女性俳句』四十八号「加藤知世子追悼」 昭和
六十一年 目次

⑭ 『女性俳句』四十八号「知世子さんを偲んで」野
澤節子 昭和六十一年 二十六頁

⑮ 『女性俳句』四十八号「旅の果」渡辺幸子 昭和
六十一年 三十四頁

⑯ 『女性俳句』四十八号「水芭蕉」桂信子 昭和六
十一年 二十四頁

⑰ 『女性俳句』創刊号 後記 昭和六十一年

⑱ 『加藤知世子全句集』五四一頁

⑲ 『加藤知世子全句集』三七四頁

⑳ 『加藤楸邨全集』 「女の目」 講談社 昭和五十
五年刊 二百三十四頁

- ②7 『加藤楸邨全集』 「女の目」 二百三十四頁
- ②8 『加藤楸邨全集』 二百三十五頁
- ②9 『加藤知世子全句集』 三百三十八頁
- ③0 『加藤知世子全句集』 三百二十五頁